早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

自己の発達における重要他者の意義

—移行対象を媒介にして—

Significance of significant others in self-development : Transitional objects as mediators

2020 年 7 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科
岩﨑　美奈子
IWASAKI，Minako

本論文は，自立した個人としての自己を確立するための心理的支援について，移行対象概念を用いて検討した研究をまとめたものである。

第１章では，個人の成熟と社会の要請の不一致が生じる現代社会において喫緊の課題である，希薄になりつつある「自己」を支え，自立の前提となる「自己の確立」へと導くことについて，先行研究の知見より述べた。「自己の確立」とは，重要他者（幼少期においては主に養育者）との良好な関係において築かれ表象機能によって維持される「自己」が，社会と密接に影響し合いながら，発達する中でまとまりを持つものとして確立される事象であると考えられた。したがって，自立へと導く「自己の確立」とは，幼少期の養育者に代表される「重要な他者との安心感のある（secure）関係性から育まれる表象を用いて自立に際する不安に対処し，まとまりのある自己を維持すること」と定義した。そして，この事象を可視化できる対象物として移行対象（transitional objects）を取り上げ，先行研究から詳細に述べた。

第２章では，個人と移行対象の関係性を「自己の確立」と捉え，移行対象を独立変数として「自立」にかかわる変数との関連を検討することにより，「自己の確立」が「自立」に及ぼす影響について調査研究により明らかにした。対象者は大学生 857 名（男性 407 名，女性 450 名, 21.3±1.09 歳）であり，「自立」にかかわる変数としては，社会的自立を促す対人コミュニケーションの前提である「自己開示（self-disclosure）」を採用した。本研究の結果は，移行対象を所有している者は所有していない者よりも自己開示量が有意に多いことを示しており，移行対象を用いることで言語表現能力が培われることを示唆するものであった。一方で，個人特性に関する変数を扱っていないことや，どのようにして移行対象の所有が自己の開示性を高め自立に寄与するのかということについては明らかになっておらず，より個別性に基づいた研究が必要であることを述べた。

第３章では，移行対象の所有経験を有する青年期の女性 10 名にインタビューを実施し，彼女らの語りを質的に分析することで，量的研究では考察することが困難であった，移行対象が個人の社会的自立を促す過程を詳細に検討した。本研究の結果は，移行対象の心理的役割が発達段階に伴って変遷していくことを明らかにした。移行対象は従来の乳幼児期の母子分離のみにその役割があるのではなく，その後も様々な心理的役割が付与されながら，青

年期においては子どもから大人への自立を促すような，自己の確立と補助の役割を担うことが示唆された。個人は成長とともに社会との関係性を維持する必要性が高まり，自己のまとまりや一貫性に揺らぎが生じることも多くなる。このようなときに移行対象によって自己の一貫性を味わい自己感を強化することで，独自の主体としての個に至る過程を促すことがうかがえた。すなわち，移行対象には自己と社会のあいだで葛藤状態にある個人の自己治癒的な側面があることを述べた。

第４章では，第３章までの研究から示唆された知見から，移行対象の機能を支援者が担う形で臨床場面に応用することで，問題を呈した子どもと，子どもの重要他者との関係性にアプローチする介入について検討した。対象は摂食障害児３症例と発達障害児６症例であり，症例の親子の検査所見および臨床経過を考察した。これらの症例は，他者との関係不良が症状悪化に影響を与えていると推察されることが共通しており，自己を補助する移行対象を必要とする環境でありながら，移行対象を見出すまでに気持ちを言語化する能力が不十分であったことが推察された。本研究では，子どもの問題行動の改善のみを治療目標とするのではなく，子どもの不安を言語化して慰めることのできる親子の安心できる（secure）アタッチメントの関係性構築を治療目標とすることが有効である可能性を提言した。その前提として，子どもの保護者が不安な気持ちを言葉で表現し，心理社会的支援を受け入れられる状態になることが重要であり，この前提がなければ子どもの支援は困難になることを述べた。

第５章では，本論文で明らかとなった知見をまとめ，今後の課題と展望について述べた。移行対象を媒介として自己の確立について検討した量的および質的研究により，社会的な自立には重要な他者との関係性が重要であることが示唆された。また，臨床場面においては，支援者が対象者の言語領域外にある情動を媒介する重要な他者として機能することで，対象者の自己がまとまり言語表現に結びつく可能性が示唆され，これにより症状の改善を促す可能性が考えられた。課題として，移行対象は誰しもが経験するものではないために本論文の知見の一般化には限界があること，移行対象の所有と自己開示における直接的な因果関係は明確に言及できないことなどを述べた。また，展望として，幼少期以降に初めて発現した移行対象についての検討や，移行対象が現れる場づくりの有用性について，介入研究による検討が必要であることなどを述べた。